

和歌山県立

もん じょ かん 文書館だより

第16号 平成17年2月



紀州徳川家初代藩主頼宣公の萩原御殿跡から野上庄（右下）を眼下に
和歌山城下（左上）を望む（海南市：黒沢牧場付近）

所蔵史料と歴史散歩

野上庄

風景の歴史

【ロマンに満ちた史料】

歴史は、むやみに推論することは慎むべきですが、幾つかの史料をつなぎ合わせるのと豊かな造形とロマンをなして見ることができません。先ごろ、本館所蔵の「紀州家中系譜並に親類書書上げ」に、興味深いことが記されているものを見出しました。それは、二百年余り前の享和元年（一八〇一）に山本源五郎家から和歌山藩に差し出された系譜で、「遠祖清和源氏山本遠江守義定二而御座候」との記述です。更に調べてみますと、同じ享和元年の山本善藏家の系譜には「箕浦冠者義明末孫」と記されています。和歌山藩での両家の初代は異なっていますが、由緒は同じとみられます。

清和源氏山本遠江守義定と箕浦冠者義明からは、歴史上の興味深い人物が浮かび上がってきます。



和歌山藩士の系譜

それは、今から八百年余り前の源平合戦の頃、吾妻鏡・平家物語・玉葉などに記され、歴史にその名をとどめながら、ある時を境に忽然と歴史から消えた近江源氏山本義経です。

系図には、他から借用して捏造されているものも間々ありますが、社会の安定した江戸中期の和歌山藩士の系譜は、「遠祖不知」と記したものが多く、「水難二而流失」「曾祖父 村百姓二而」など實際的にまとめられています。また、所蔵する他の山本家の系譜には、同様の記述は認められないものです。このことからすると、先の山本両家の系譜は、家伝を単に記したものとみられます。

近江源氏の先研究には「清和源氏の家系」（奥野敬之氏）などがあります。

【二人の義経】

義経といえば誰もが思い浮かべるのは、源頼朝の弟である源義経でしょう。しかし、同じ時代を生きたもう一人の源義経がいました。それが近江源氏山本義経です。和歌山藩士の系譜に記された清和源氏山本遠江守義定は、山本義経の父であり、箕浦冠者義明は、子供にあたるとみられます。

近江源氏山本氏の由来地は、滋賀県内の他所にもありますが、「近江東浅井郡志」では、源頼義の三男新羅三郎義光の系譜を引く山本義定・義経親子の頃に、近江国東浅井郡の山本山に築城し、山本氏と称したと伝えられています。

治承四年（一一八〇）に三条高倉宮以仁王の平氏追討の令旨が発せられました。この令旨は、和歌山にゆかりの深い源行

家（新宮十郎）によって、諸国の源氏に伝えられました。治承四年八月十七日に源頼朝が伊豆国で挙兵、九月七日に木曾義仲が信濃国で挙兵、十一月七日に源行家が熊野の軍勢とともに尾張で東進する平氏軍の前面に立ちふさがります。同月二十日に近江源氏山本義経・柏木義兼らが勢多（大津）と野路（草津）で挙兵します。源行家の平氏軍の前面への進出と山本義経らの背後での挙兵は、呼応してなされた密接な関係がうかがわれます。

平氏追討に挙兵した源頼朝・木曾義仲・源行家・山本義経らは、河内国石川郡壺井（現・大阪府羽曳野市）に起こった河内源氏源頼信・頼義に連なる一門です。

治承四年十二月に山本義経の山本城は、平知盛らに攻められて落城したことが吾妻鏡や平家物語などに記されています。その後、山本義経は、鎌倉に向かっています。同じ頃、奥州にいた源義経も鎌倉に参着しています。奇しくも、同じ時期に源頼義の子義光四代目と義家五代目の二人の義経が鎌倉にいます。

源行家は、甲斐源氏武田氏の力を借りてのこととされていますが、信濃にまわり、木曾義仲とともに寿永二年（一一八三）七月に京の都に入っています。この時、山本義経も入洛し、四条より西、九条より北、朱雀より西、丹波の境奥に至る区域の警備にあたっています。しかし、木曾義仲軍の規律はゆるく、横暴な振る舞いで都は混乱します。間もなく木曾義仲と源行家が不仲になり、源行家は別行動を取りはじめます。同じ頃に、山本義

経も木曾義仲と袂を分かつたようです。寿永三年十二月には、源頼朝の命をうけた源義経に、木曾義仲（征夷大将軍）が宇治で大敗します。この戦いには、何故か山本義経の名はなく、子の義弘の出奔が記されています。そして、源義経が入洛し、歴史に颯爽と登場すると、入れ替わるように山本義経が歴史の記録から消えてゆきます（近江東浅井郡志等）。

このためにか、山本義経と源義経が同一人物だとの説も生まれています。

【それからの義経】

源行家は、二人の義経の運命と深くかわるることになります。源行家は、木曾義仲と不仲になり、別行動をとって、寿永二年（一一八三）十一月に播磨山室（兵庫県）の合戦で平氏軍に敗れています。源行家は、都に戻らず、勢力下にあった和泉地方をめざし船で吹飯浦（現・岬町）に上がり、河内長野城に籠もったとされています。和泉・河内は、源行家の支配地であり先祖の地です。また、姉である鳥居禅尼（たつたはらの女房）の縁でつながる熊野の勢力を有する紀州と接する



源頼義の墓（河内源氏発祥の地：羽曳野市）

山本義経は、源行家と前後して木曾義仲と袂を分かったようで、これまで行動を共にしてきた源行家の勢力下にあり、先祖の地でもある河内・和泉に向けて身を寄せたとしても頷けます。その後において、源行家は、木曾義仲との対立を深め、木曾義経旗下の武将樋口兼光に攻められ、高野山に逃れたとされています。

この時、山本義経も身を寄せていた河内・和泉の地域を離れ、和泉山脈を越えて、紀州野上庄に身を寄せたとしても当然の成り行きでしょう。野上庄は、天然の要害である和泉山脈・紀ノ川を越えたところにあり、高野山領の神野庄・猿川庄をへて高野山に直結しています。また、高野山からは急峻な紀伊山地に守られて熊野へ続いています。今から二百年余り前に、和歌山藩に差し出された系譜は、そのことを物語っているといえます。

木曾義仲は、源義経らに追われ、元暦元年（一一八四）一月に粟津で敗死します。それは、木曾義仲が京の都に入ってから半年余りの出来事です。

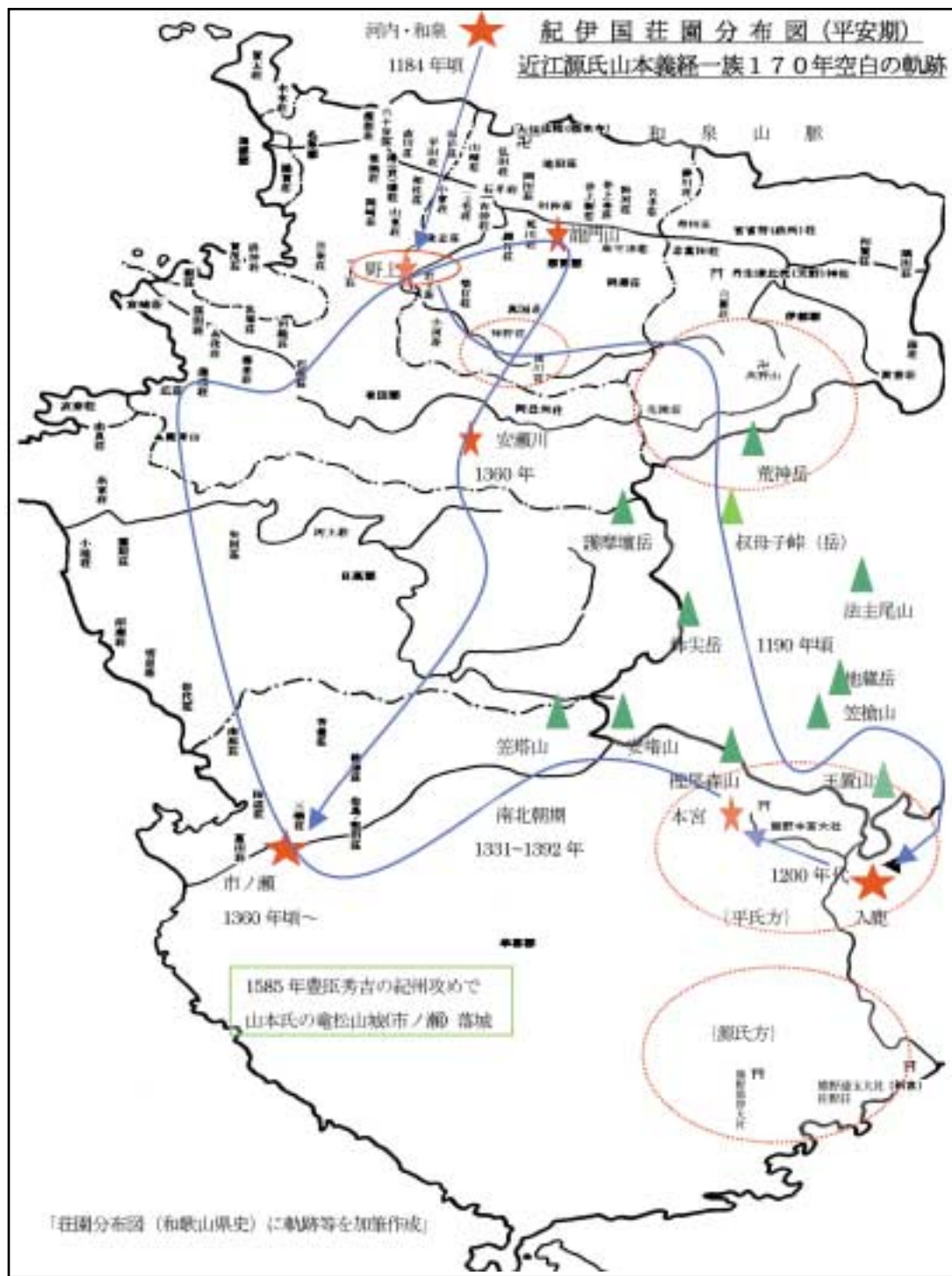
木曾義経を討った源義経は、平家追討に転戦し、文治元年（一一八五）三月十四日、源氏に味方した熊野水軍も参戦して壇ノ浦に平家を滅ぼします。しかし、源義経の颯爽たる活躍の陰で、時代は新たな方向に動こうとしています。都で喝采をもって受け入れられる源義経は、天下を狙う源頼朝にとっては、疎ましい存在にみえるようになったことでしょう。

平家滅亡後に、源義経・源行家らは、源頼朝との対立を深めていきます。文治元年（一一八五）十一月には、源義経・

源行家らは、西国に逃れようとはしますが、摂津の大物浦（現・尼崎市）で難破し、小船で支配地である和泉浦をめざしたとされています。文治二年（一一八六）二月には、源義経と源行家の捜捕を命じる宣旨が熊野・金剛山と大和・河内・伊賀・伊勢・紀伊・阿波の国司にだされます。

源行家は、熊野に逃れようとして、和泉の大木郷で捕らわれたとも、小木郷（現・貝塚市）で討たれたとも伝えられています。これらは、木曾義仲の敗死から二年余りの出来事です。源義経は、源行家が討たれた同じ年の文治二年に愛する静御前と吉野で別れをつげます。それからの

源義経は、活路を求めて奥州に逃れ、文治五年（一一八九）四月三十日に奥州衣川（岩手県西磐井郡平泉町）で討たれます。源平合戦は、わずかの間に目まぐるしい展開をみせた和歌山県にかかわりの深い壮大な人間ドラマです。このドラマは、南北朝の争乱へと続きます。



【山本義経の足跡】

近江源氏山本氏の足跡は、法然上人の熊野詣の記録とともに伝承されています。熊野詣は、承暦四年（一〇八〇）の権大納言藤原師通の参詣が貴族層に広まったことが盛行のきっかけで、上皇の行幸も多く、後白河上皇は三十三回に及んでいます。文治三年（一一八七）九月に後白河上皇が熊野に行幸した同じ年、浄土宗の開祖法然上人も熊野に参籠なされたとみられます。浄土宗大辞典には、江戸時代中期（元禄十一年）の『蓮門精舎旧詞』をうけて、和歌山県海南市沖野々。月光山勢至院。一一八七年（文治三年）法然上人が熊野権現参籠の途次、粉河寺で教化され、ついで沖野々村に山本義明（箕浦冠者）中村庄司などの帰依をうけて念仏道場を建立したのが開創といわれる。一六七六年（延宝四）知恩院三十八世



月光山勢至院法然寺の山門と古木の桜（海南市）

玄譽萬無が中興開山として宗祖の旧跡を相統。紀州公の崇敬も厚く、寺格一萬石末寺二八箇寺」と記されています。月光山勢至院は、寺名を「法然寺」といいます。寺には、法然上人から阿弥陀如来像を贈られたとの伝承があり、お使いの感西上人は仏像などをとどけて熊野参詣に向かい、有田郡西ヶ嶺の浄土寺を開基したとされています（金屋町史）。ここに記される山本義明（箕浦冠者）は、先に示した和歌山藩士の系譜に記された人物と在所などから同じとみられます。寺には、山本義経が陣中で念じていたとされる持念仏が安置されています。また、寺の所在地は、源平合戦の頃には野上庄といわれたところで、中村庄司とは、岩清水八幡宮の莊園であった野上庄の中村にいた「庄司」であるとみられます。この頃の紀州では、各庄（莊）に名主と号し、庄司（莊司）殿と呼ばれる人物がいて、これを主君のように仰いでいます。法然上人は、野上庄を二度訪れたとみられます。初めて訪れてから二十年後に、法然上人は「建永の法難」を受けて、承元元年（一一〇七）に流罪（流罪地は土佐）となって讃岐まで行かれます。その年の内に「畿内洛外往還の勅免」で赦免され、帰洛の途次に乗っていた船が暴風雨にあつて、大川浦（和歌山市大川）にあがられます。この出来事は、すぐに野上庄にもたらされたとみられ、山本義明と中村庄司が、法然上人を迎えにいったと伝えられています。大川浦は、和泉山脈を越えた北側にあり、野上庄からは遠隔の地です。大川浦には、吉宗公が和歌

山藩主になる前に刺客から身を隠して潜んだとの伝承があります。そうすると、江戸時代には、和歌山城下からも隔離された地であったとみられます。当然に、八百年余りも前のこと、野上庄とはさらに隔絶されていたでしょう。このような地理的な関係にある大川浦から何故に野上庄に情報がもたらされたのでしょうか。それを解くカギが江戸時代に編纂された「紀伊統風土記」に記されています。それは、同書の大川浦の旧家の段に「享和の頃（一八〇一〜一八〇三）其家の棟木に古き箱を打着たるを見出せり、取て開き見るに木曾義仲旗下の士大夫坊覚明の書翰なり」というものです。この旧家は、法然上人が大川浦に上がられた際にお世話をした家と記されています。また、大夫坊覚明とは、木曾義仲への比叡山の協力を取り付けた人物です。この人物は、平清盛に追われ、源行家と行動をとるとし、後に木曾義仲の傘下に入り祐筆となつて、大夫坊覚明と名乗ります。しかし、木曾義仲の敗死によつて、比叡山に登り慈円の門に入つて浄寛と称します。後に親鸞に接して吉水の源空（法然上人）の弟子になり西仏と称します。その後は、親鸞の弟子になり、著作も残しています（国書人名辞典等）。



「山本義経の持念仏（法然寺安置）」

発見された書簡には、「木曾義仲旗下」とあり、大夫坊覚明が木曾義仲と共にあつたときのものです。よつて、山本義経と同様に、木曾義仲にかかわりながら生き延びた人物が、大川浦にもいたことは明らかです。野上庄の山本一族と大川浦の人物は、常に連絡をとりあつていたのでしょうか。それ故、法然上人が大川浦に上がった情報が野上庄にもたらされ、争いもなく、山本義明と中村庄司によつて、法然上人を野上庄へ迎えることができたものと推察されます。近江源氏山本義経は、木曾義仲軍に攻められて高野山に逃れた源行家と同じ頃に紀州に入つたとみられます。山本義経には、源頼朝と敵対した記録はみえないにもかかわらず、歴史の表舞台から姿を隠し、子の義弘も出奔しています。そこには、木曾義仲が討たれて一ヶ月余り後に、富士川の戦いで武功のあつた甲斐源氏の後継者武田忠頼と子らが頼朝に謀反の嫌疑をかけられて殺されることが作用しているのではないのでしょうか。この事件は、甲斐源氏と同じ新羅三郎義光の家系にある山本義経には、身の保全策を要するほどに情勢が厳しくみえたと推察されます。また、源頼朝は、文治二年（一一八六）に对立を深めた源義経と源行家の捜捕を命じる宣言を發します。これは、山本義経に向けられてはいないのですが、同じ「源氏」の「義経」と呼ばれ、源行家と行動をとりにした者としては、危惧するものがあつたでしょう。同じ時代を生きた「二人の義経」は、際立つた違いをみせて歴史から去っていきます。

【紀州の山本氏】

紀州において、山本氏が歴史記録に現れるのは南北朝時代のことです。二人の義経が歴史から去って百七十年余りがたっています。太平記の紀州龍門山軍事の段に、延文五年（一三六〇）四條中納言隆俊が紀伊国最初峯に陣を取るとあり、紀州の諸族として「野上・山東・貴志・山本・恩地・牲川・志宇津・禿」と記され、別段に「恩地・牲川・貴志・湯浅・田邊の別当・山本判官半時も支えず龍門の陣を落とされ安瀨川城へぞ籠もりける」とも記されています。ここでの山本氏は、熊野八莊司の一つとされています（和歌山県史）。山本氏は、歴史に名を残すほどの豪族であったにもかかわらず、残された記録が少ないために、南北朝以前の系譜が明らかではないのです。山本氏と同じように熊野八莊司の一つとされる湯河（川）氏は、甲斐源氏武田氏を祖とし、道湯川村（現中辺路町）を本拠としたといわれています。山本氏は、戦国時代には、市ノ瀬（現上富田町）の竜松山城が居城で、その麓の対岸に館があったとされます。



竜松山城址から富田川を望む（上富田町）

歩行記・太平記などによって山本氏・湯川氏など二十余りの氏を示しています。同書の山本氏の系譜では、山本判官忠行が熊野八莊司で、忠行の子山本判官忠継が楠木氏旗下とされ、山本判官忠行以前の十四代は明らかでないしながら遠祖を藤原永尊（熊野別当一二代）としています。これらの諸説が生じるのは、市ノ瀬（紀州）の山本氏に「熊野の人」との伝承と「かつて本宮に住まい」との史料があり、何れも遠祖と山本忠行との間の系譜が明らかでなく、紀州では山本氏の「氏」の発祥と結びつくところがないことによるとみられます。

紀州は、都に近く急峻な地形で覆われ、都から落ちて再起をはかる要衝の地として歴史に登場します。都から姿を消して消息を絶った山本義経は、再起を期して熊野の山中にひそみ、山本氏の祖となったとみられます。しかし、近江源氏山本氏と南北朝時代から戦国時代まで紀州の歴史に名をとどめた山本氏を直接に結ぶ史料は明らかではないのです。

【山本義経一族空白の軌跡】

紀州の山本氏は、百七十年の時を越えて、南北朝の争乱期に突然に歴史に躍り出た感じがします。山本義経一族が都を離れ河内・和泉をへて紀州に入ったのは源行家の行動と絡めば寿永三年（一一八四）の頃でしょう。その頃の紀州では、都の勢力と絡みながら各庄（荘）の覇権をかけた領地争が生じています。野上庄の近く荒川庄・田仲庄や隅田庄などでの領地争が見えます。文治二年（一一八六）の佐藤能清の配下による荒川庄の押領は鎌倉殿下（頼朝）の仰せを騙ったものです（和歌山県史）。当時の野上庄は、岩清水八幡宮の荘園で、中村庄司と記される人物が名主で庄司殿と呼ばれていたのでしょう。山本義経一族は、武力を持った客分で領地を守る庄司との利害が一致したのだと推察されます。

山本義経が身を寄せた野上庄は、紀州の入り口にあり、既に多くの荘園が確立されていて、中央からの政治支配の影響も受けやすいところです。源頼朝が征夷大将軍に任じられたのは、建久二年（一一九二）のことです。しかし、それよりも前、源頼朝の天下が固まった頃には、源行家と一時行動をともにした山本義経とすれば、一族再起の拠点となる荘園の開発地を求めて、熊野の山深くに分け入らなければならなかったことも頷けます。源行家から熊野の情報を得ていた山本義経は、義明と郎党の一部を野上庄にどめ、荘園のある海岸沿いを避けて、高野山から熊野へ向かいます。目指すは熊野三山領でありながら支配に従わない



近江国の山本山城跡（湖北町）

山主（金堀）邑（史料がなく本宮に属せば平氏方か）後の入鹿庄（現三重県紀和町）です。「大宝三年（七〇三）に牟婁の楊枝鉦の銀が買かれた」との記録（紀伊統風土記）から寿永三年（一一八四）の頃には山主の邑があったと推察されます。山本義経一族は、佐藤氏が荒川庄を押領した如くに、熊野三山の命をもって山主の邑を制圧したとみられます。この地には「僻遠の地で令行われず、山中の守護として京より土族山本氏を招く」（姓氏家系大辞典等）との伝承があります。山本氏には三子があり、長子（祖の起源には諸説ありますが、一説に山本義経三代目義章長子頼兼）が入鹿荘の地頭になったと伝えられています（紀和町史）。

近江源氏発祥の地と入鹿に共通するのは「鍛冶」です。湖北は、古代から製鉄の地で、湖北山本の近く国友村から後世に鉄砲で有名な国友鍛冶がでます。山本義経一族の山主邑（後の入鹿荘）の押領は、鉱物資源に目をつけ、タタラ職人を伴ったもので、刀鍛冶も後に招いた



水車谷鉱山付近の楊枝川（紀和町）

とみられます。刀鍛冶（包貞）は、大和からとみられますが、それ以前は明らかではないものです。入鹿は、古刀期に大和手掻派の入鹿鍛冶として名を残し、湖北地方が大和手掻派の一大拠点となる美濃地方と接しているのは、偶然ではないようにみえます（日本刀辞典等）。また、熊野の山主集団は、戦国時代に甲斐に移り、黒川金山の金山衆として金山の開発のみならず城攻めの武功（熊野の田辺四郎左衛門尉）で史料に記されていて存在が明らかです（山梨県の歴史等）。

山本義経一族の末裔は、入鹿の近辺で産する金銀銅鉄や刀などの生産で勢力を蓄えて本宮に進出したとみられます。本宮の山本氏は、入鹿八幡宮の大永三年（一五三三）の棟木の一族寄進に「本宮ノ氏子」として存在が記されています。また、この地の大谷鉱山は、岸壁に刻まれた「延元二年」の文字から南北朝時代には稼動し、入鹿の鉱物資源が南朝方の軍資金の



金鉱石（紀和町鉱山資料館展示）

一つとなったとみられています（紀和町史等）。入鹿に入ってから百七十年余り後、既に本宮に居を構えていた紀州の山本氏は、南北朝の動乱を背景として、熊野八庄司山本判官忠行の頃に、現在の国道三一一号に沿って田邊方面へ勢力を拡大し、市ノ瀬（現上富田町）に土着したとみられます。市ノ瀬の山本氏には、本宮からの進出であることを示す興禅寺文書などの史料があります。また、入鹿と同様に市ノ瀬の周辺には、清水・鉛山谷・高垣などの鉱山があり、「古くより鉱穴あり」（紀伊続風土記）と記されています。市ノ瀬の清水鉱山は、銀を含有する方鉛鉱を産出する銀鉱床の鉱山だとされています（上富田町史）。紀州の山本氏には諸説があるものの、山本氏の居城が市ノ瀬（竜松山）に築かれた意味こそが本宮から入鹿を介して鉱物資源と鍛冶で湖北の山本へ連なり、近江源氏説を裏づけるようにみえます。

ちなみに、以仁王から平氏追討の令旨を取り付けた撰津源氏源頼政の撰津には多田銀山などの鉱山があります。また、源頼朝は、源義経にからめて奥州藤原氏を滅ぼしましたが、目的は奥州の金であったともみられます。このように、鉱物資源は、繁栄と勢力の保持にとって有力な手段であったのです。源平合戦の近江源氏山本氏と南北朝争乱期の紀州山本氏との間の空白は、史料と財力となる鉱物資源でつなぎあわせると、野上庄をへて熊野へ入り、入鹿から本宮・市ノ瀬へと転回し、百七十年余り後に、再び野上庄の近く龍門山の戦に熊野八庄司山本判官として名を記すという軌跡が浮び上がってきます。

近江源氏関連略系図



「国史大辞典・系図要覧・和歌山県史にて作成」

その頃の野上庄の付近には、今に確認されるもので十六余りの城や砦が築かれています。法然寺のある小高い丘にも城山（じょうやま）という小字名が今も残っています。また、北に飯盛・龍門、近くに楠木正久が配下の者五百三十名余りとともに討ち死した篠ヶ城（大旗山）の古戦場があります。更に、南の長峯山脈を越えると湯浅一族の拠点である湯浅・藤並・石垣・安瀬川の城があり、西の藤白山には、紀伊守護山名修理大夫義理が入った大野城があります（海南市史等）。これらの地域に囲まれた野上庄は、その後軍事的な要衝の地にあり、紀州に入

った初代藩主徳川頼宣公は、黒沢山の山頂付近に萩原御殿を築き、野上庄に御狩場を設けています。戦国の余韻冷めやらぬ頃のこと、山上から何に思いをめぐらしたのでしょうか。

萩原御殿のあったところは、現在の黒沢牧場の休憩所あたりとのこと。現在の黒沢所からは、真下に中世の野上庄が見え、北西に和歌山城を中心にした和歌山市、正面に自然の要害である和泉山脈を境に紀ノ川平野が遠望でき、龍門山から飯盛山へ続く山なみ、手前に篠ヶ城跡、西に大野城跡、振り返れば有田から熊野の峯々へと続き「兵どもが夢のあと」を偲ぶことができます（表紙写真参照）。

紀州の山本氏は、南北朝時代から二百年余り後の戦国時代まで続きます。竜松山城は、天正十三年（一五八五）の豊臣秀吉の紀州攻めで落城し、城主山本主殿頭康忠は奥地に敗走するものの、一年後に藤堂高虎に討たれます。

（小谷 正・駒野 裕佳）

歴史講座

今年度の歴史講座は、10月24日(日)、31日(日)、11月7日(日)の3回にわたって、きのくに志学館で開催されました。

24日は、和歌山県立田辺高等学校教諭の土永知子氏が『南方熊楠が見た熊野の自然とその現在』というテーマで講演しました。熊楠の時代から現在にかけて、熊野の自然をいくつもの観点から画像をとおして詳しく紹介しました。アンケートによると、「人間が生まれながらに備わっているジオフィオリア(自然を愛する心)を発揮できなかった集団は、自然を破壊しすぎて滅んでしまったという話が印象的だった」「熊野古道を歩きたくなつた」「改めて自然の大切さを感じさせられた」等の声がありました。

31日は、当館文書課長の森脇義夫が『和歌山の街道(古座街道・高野街道) 1』というテーマで、当館嘱託研究員の伊藤信明が『明治二十二年大洪水と熊野本宮大社』というテーマで講演しました。森脇課長は、紀南地方のメインルートである熊野街道の本線が、明治38年に大辺路に確定するまでの様子を、当時有力視されていた古座街道を中心に紹介しました。古座街道に傾きかけていた流れを白紙に戻し、その後の街道整備にも影響を与えたのが、明治22年の大水害でした。この大水害については、伊藤研究員が、堀家文書の「明治廿二年八月一八日我和歌山県下前代未聞ノ大洪水ニ附和歌山新聞抜萃記」から紀伊半島を襲った台風による

県内の洪水の被害状況や熊野本宮大社の社殿流失の様子を、当時の公文書から熊野本宮大社の社殿が大斎原から現在の場所に復旧するまでの再建の取り組みの様子を詳しく紹介しました。

7日も、森脇課長が『和歌山の街道(古座街道・高野街道) 2』というテーマで講演しました。高野参詣のメインルートが、大正になると従来の橋本ルート、粉河ルート、笠田ルートの3ルートから、高野口駅へ神谷を通る新高野街道へと変遷する様子を、明治・大正期の交通事情や県の道路政策を織り交ぜながら紹介しました。受講者によると、県会の論戦の様子が興味深かつたようです。

多くの受講者の方から「これからも和歌山の歴史をもっと聞かせてほしい」という要望をいただきました。今後、さらに魅力ある講座を実現できるよう努めたいと思います。(中村 憲司)



土永知子氏の講演

平成16年度民間所在資料調査員研修会
「新たな時代のアーカイブズ」
「和歌山県の公文書管理制度」

橋本・伊都地域と有田地域で実施中の民間所在資料保存状況調査に関する研修会が16年11月24日に開催され、国立公文書館梅原康嗣氏と、和歌山県総務部総務学事課萩原享氏が講演されました。本調査の調査員の外、県内市町村の市町村史編さん担当・教育委員会文化財担当者や合併を進める市町村の文書主管課・合併協議会の方々も参加されました。

梅原康嗣氏の講演

「新たな時代のアーカイブズ」

梅原氏は、民間所在資料(古文書)から国の公文書まで、あらゆる歴史的な文書の保存についての専門家で、国際的に活躍されている方です。最近よく耳にする「アーカイブズ」という言葉は、当館のような(公)文書館施設、或いはそこで保存されるべき歴史的な文書(記録)のことを指します。アーカイブズをめぐる国内外の最新情報をお話しいただきました。

国では、小泉首相が国会の施政方針演説で公文書館制度の整備に触れる等、動きが活発化しています。前の福田官房長官時代から公文書館制度の研究が始まり、現細田官房長官の諮問機関「公文書等の適切な管理、保存及び利用に関する懇談会」が報告書をとりとめています。そこで、我が国の公文書館の制度・規模・職員数等は、他の主要国と比べて著しく立ち後れていることが指摘されています。

梅原氏は、IT化や市町村合併が進んでいる現状にも触れ、重要な記録を未来に

残す公文書館制度の充実が、民主主義国家である我が国にとって重要な課題であることを述べられました。



梅原康嗣氏の講演

萩原 享氏の講演

「和歌山県の公文書管理制度」

本研修会では平成14年度以降、市町村合併に伴う公文書保存についての講演も行っており、今回は、公文書の適切な管理の具体例として、県の公文書管理制度を、県総務学事課職員が紹介しました。

萩原氏は、「県の保有する情報は、県民の共有の財産であり、県民の知る権利」と、「行政の説明責任」について明記した情報公開条例の理念について触れ、情報公開が適切に行われるためには、その前提として適切な文書管理が行われていなければならず、情報公開制度と公文書管理制度はまさに「車の両輪」であると述べました。そして、和歌山県庁の公文書管理制度を詳しく説明し、今後の課題として、更なる適正化の推進と、電子県庁化への対応を挙げました。(藤 隆宏)

化への対応を挙げました。(藤 隆宏)

貴重な資料・文献の寄贈

平成16年度も貴重な歴史資料・文献の寄贈がありました。多くの方々にご利用いただけるよう大切に保存します。

・笠原正夫氏

昭和32年10月から平成12年6月までの「歴史地理教育」528点

・遠藤富士子氏

銚谷栄衛氏旧蔵図書（市史、町史、山内家史料 幕末維新第9編、第15編）など（169点）



平成17年度事業のお知らせ

古文書講座

開催時期 冬期

回数 5回

会場 きのくに志学館

受講料 無料

申込方法 詳細は広報紙等に掲載

古文書に関心があり、古文書の基礎知識を習得したい方を対象に開催します。

歴史講座

開催時期 秋期

回数 3回

会場 きのくに志学館

受講料 無料

申込方法 詳細は広報紙等に掲載

和歌山県の歴史をご紹介します。

民間所在資料保存状況調査

県内の個人のお宅や蔵、寺社等で保存されている記録類（古文書等）がどこに、どんな状態であるか（保存状況）を調査しています。各市町村の調査員が電話・訪問により調査しますのでご協力お願いします。また、所蔵者の方に限らず、文書の所在をご存じの方は是非文書館にお知らせください。

常設展示

収蔵資料を多くの方々にご覧いただくため、パネル展示はきのくに志学館正面玄関及び文書館入口に、ケース展示は文書館閲覧室に常設しています。

文書館の利用案内

利用方法

閲覧室受付にある目録等で必要な資料、文書等を検索し、閲覧申請書に記入のうえ受付に提出してください。文書等利用の受付は閉館30分前までです。

閲覧室書棚に配架している行政資料、参考資料は自由に閲覧してください。複写を希望される場合は、複写承認申請書に記入のうえ受付に提出してください。複写サービスは有料です。

開館時間

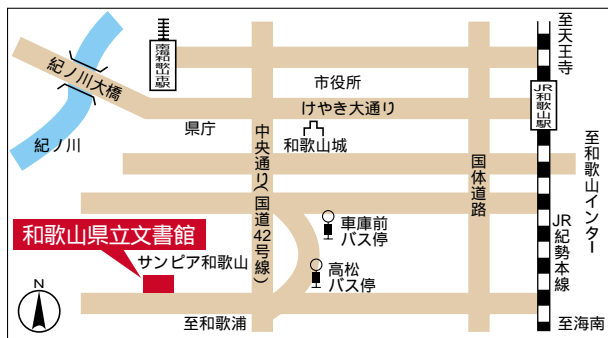
火曜日・金曜日 午前10時～午後6時
土曜日・日曜日 午前10時～午後5時
5月5日・11月3日 午前10時～午後5時

休館日

月曜日・国民の休日（5月5日・11月3日を除く。ただし、その日が月曜日にあたるときはその翌日）
年末年始（12月28日～1月4日）
館内整理日（毎月初日・1月5日・月の初日が月曜日の場合は翌日も休館）
特別整理期間（毎年6月中に10日間）

交通のご案内

和歌山バス高松バス停下車徒歩約3分
JR和歌山駅からバスで20分
南海電鉄和歌山市駅からバスで20分



ホームページアドレス

<http://www.wakayama-lib.go.jp/monjyo/montop.htm>

和歌山県立文書館だより 第16号
平成17年2月28日 発行
編集・発行 和歌山県立文書館
〒641-0051
和歌山市西高松一丁目七 三八
きのくに志学館内
電話 〇七三 四三六 九五四〇
FAX 〇七三 四三六 九五四一
印刷 有限会社隆文社印刷所